

令和 6 年 5 月 2 日現在

機関番号：12608

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13266

研究課題名（和文）貨幣学説史からの現代貨幣理論(MMT)の批判的検討：マルクス派・ケインズ派の射程

研究課題名（英文）Critical Study of Modern Money Theory (MMT) from Marxian and Keynesian Conceptions of Money

研究代表者

江原 慶 (Ehara, Kei)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・准教授

研究者番号：20782022

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、マルクスの商品貨幣論の射程を、ケインズ派の表券貨幣論のそれと比較し、それをもとに現代貨幣理論（MMT）の政策目標を達成できるか、検討することであった。貨幣論については、単著『マルクス価値論を編みなおす』（桜井書店、2024年）にて、構造的な再編を含む新しい貨幣論を提示した。それに基づきMMTに批判的検討を加え、MMTの目指す民主的な社会像を、「脱成長貨幣論」を通じて達成するという展望を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ケインズ派の表券貨幣論のうちに論じられてきた信用貨幣論が、マルクス派の商品貨幣論にも取り込みうることを明らかにした点に、学術的意義がある。これにより、ケインズ派とマルクス派の基本的争点は、信用貨幣の扱いではなく、国家の取り扱い方にあることが浮き彫りとなった。貨幣論は純粋に経済理論・思想的な問題ではなく、現実の政策の指針となるべきものであり、「脱成長貨幣論」のように、貨幣論史の観点から政策的議論にコミットできることが示された点が、社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to compare the scope of Marx's theory of commodity money with that of Keynesian chartalist theory, and to examine whether it could achieve the policy goals of Modern Monetary Theory (MMT). Regarding monetary theory, a new theory of money, including structural reorganization, was presented in the single-authored book "Redesigning Marxian Theory of Value" (Sakurai Shoten, 2024). Based on this, critical examination was applied to MMT, and the prospect of achieving the democratic social vision pursued by MMT through "degrowth monetary theory" was obtained.

研究分野：マルクス経済学

キーワード：マルクス ケインズ MMT 貨幣 金融

1. 研究開始当初の背景

先進各国にて財政赤字が積み上がり、中央銀行が膨大な公債を抱えるなか、主流派の経済学では緊縮財政の必要性が説かれている。それに対して、財政赤字はそれ自体として問題ではないとし、中央政府と中央銀行が一体となって弾力的な通貨供給を行い、「マイルドなインフレ」を実現しつつ、完全雇用を達成しようとする「現代貨幣理論(Modern Monetary Theory: MMT)」が、異端派の経済学(Heterodox Economics)の議論としては異例の注目を集めている。

MMTは、完全雇用を通じ、SDGsにおける「1. 貧困をなくそう」という目標につながる。さらに、マイルドなインフレの下での経済成長を実現しようということから、SDGsの「8. 働きがいも経済成長も」にもかかわる。今般のコロナ危機による経済後退に際し、政府による補償が求められるなか、財政的制約を突破する手法としてもますます支持を増してくることが予想される。

MMTの思想的背景としては、J. M. ケインズの貨幣理論=表券貨幣論(Charteralist Theory of Money)がよく知られているが、他方で日本では、松尾匡氏(立命館大学)や岡本英男氏(東京経済大学)など、マルクス経済学の観点からこれを積極的に評価する論者も出てきている。しかし通常、K. マルクスの貨幣論は、商品貨幣論(Commodity Theory of Money)だと考えられている。この商品貨幣論は、国家権力による独自の貨幣創出を認めないため、MMTの依って立つケインズの表券貨幣論とは対立する。なぜ商品貨幣論に立脚するはずのマルクス経済学の立場から、それと対立する表券貨幣論を基礎としたMMTが支持可能なのだろうか？ MMTは貨幣論の立場を超えた一般性をもつのだろうか？

2. 研究の目的

この問いに答えるために、本研究では、マルクスの商品貨幣論の射程を、ケインズ派の表券貨幣論のそれと比較し、それをもとにMMTの政策目標を達成できるか、検討することを目的とする。そのために、1. マルクス派とケインズ派の貨幣理論の異同を明らかにした上で、2. これまであまり着目されてこなかった、マルクス派とケインズ派の金融理論の異同を、貨幣論に関連させて明らかにする。それらの比較に基づき、3. マルクス派 MMT の可能性を検討し、MMTの一般化を図る。

3. 研究の方法

(1) マルクス派の貨幣理論を、ケインズ派の貨幣理論と比較検討する。方法としては、マルクスの貨幣理論を基礎づけてきた『資本論』の価値形態論を再検討し、ケインズの『貨幣論』などにみられる表券貨幣論と比較する。価値形態論は、ケインズも評価している計算貨幣概念と通ずるところがある一方で、貨幣概念を理論的に明らかにするにあたり、商品の概念から出発する必要があるかどうかという点が、マルクス派とケインズ派とで鋭い対立点になることが予想される。

(2) マルクス派の金融理論を、ケインズ派の金融理論と比較検討する。マルクス派の金融理論を基礎づけてきた『資本論』第3巻第5篇については詳細な草稿研究が近年まとめられた(大谷禎之介『マルクスの利子生み資本論』全4巻、桜井書店、2016年)ので、これを利用する。ケインズ派の金融理論としては、ケインズのそれとともに、代表的なケインズ派金融理論として知られるH. ミンスキー(H. Minsky)の「金融不安定仮説」を比較対象として取り上げる。マルクス派もケインズ派も、異端派の経済理論として、金融の不安定性を重視する点は類似しているが、他方でマルクス派には銀行を中心として金融を安定させる観点もある。この相違点と、貨幣論における相違点との関連性が、貨幣論史研究に独自の視点をもたらす。

(3) 以上(1)と(2)の比較研究に基づき、MMTの実現可能性を検討する。完全雇用とマイルドなインフレの両立という、MMTの掲げる目標のうち、マイルドなインフレは、マルクス派の金融理論でも展望可能だと予想される。マルクス派には、金融の不安定性の認識だけでなく、その安定性についての認識もあり、それは銀行システムに対する適切な規制の必要性を示唆する。それに対し、完全雇用を貨幣制度の改革によって実現することは、マルクス派の見地からすれば、困難であることが予想される。貨幣制度の改革をもたらすのは商品流通の改革までであり、商品生産の部面の改革には、実体経済レベルの構造変革が要される。とすれば、完全雇用の達成はMMTだけで可能とは一般にはいえないだろう。

4. 研究成果

貨幣論・金融論研究としては、マルクス派の金融論研究史をまとめ、銀行を中心とした金融市場の構造を明らかにする論文集を編み、英文で発表した(Kei Ehara ed., *Japanese Discourses on the Marxian Theory of Finance*, Palgrave/Macmillan, 2022)。そのほか、英文査読誌にて、金融論研究史と並行して進められた商業資本論研究(Shinya Shibasaki and Kei Ehara, “What is commercial capital? Japanese contributions to Marxian market theory”, *Capital and Class*, 46 (2), 2022)、および貨幣論研究史(Kei Ehara and Akihito Imai, “The Japanese history of Marxian value-form analysis: Focusing on the Unoist approach”, *Japanese*

Political Economy, OnlineFirst, 2023)についての論考を発表した。その上で、ケインズ派表
券貨幣論の知見を取り込みつつ、マルクス派の貨幣論をもって信用貨幣論を説明する新たな価
値論を単著で発表した(江原慶『マルクス価値論を編みなおす』桜井書店, 2024年)。

MMT 研究に関しては、まずマルクス派からの批判的検討を論文で試みた(江原慶「貨幣の変容
論と現代貨幣理論」『信用理論研究』第40巻, 2023年)。その上で、MMTのような社会改革案を
検討する上で比較対象となる脱成長論の論考を発表したり(江原慶「脱成長論のマルクス経済学
的検討」『季刊経済研究』第41巻第1-4号, 2023年)、エコロジー論につながる地代論の検討を
英文査読誌に発表するなどした(Kei Ehara, “Reconstructing Marxian Theory of Ground
Rent: Based on Japanese Development of Marxian Political Economy”, *Capitalism Nature
Socialism*, 34(4), 2023)。さらに、MMTのような社会改革案を考える上で基礎となる労働の問
題について、特に人々の労働の関わり方に関する理論を、共編著(石井まこと・江原慶『多様化
する現代の労働』法律文化社, 2024年)および英文査読誌(Kei Ehara, “Marx's Ideas on Work
Organization: Reinvestigating the Conceptions of Cooperation, the Division of Labor,
and Machinery”, *Science and Society*, 87(4), 2023)で発表した。こうした一連の検討の結
果、MMT が目指す民主的な社会像のためには、マルクス派のバージョンのMMT を展開するより、
むしろ独自の「貨幣政策」が主張しなければならないことが明らかになった。そこで、マルクス
派独自の政策的貨幣論として、「脱成長貨幣論」の構想を提示した(江原慶「脱成長貨幣論:F.
ソディの貨幣論の批判的検討を通して」『コモンズ』第3号, 2024年)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 柴崎慎也・江原慶	4. 巻 5
2. 論文標題 商業資本とは何か：日本におけるマルクス市場理論の貢献（中国語）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国外理論動態	6. 最初と最後の頁 20-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江原慶	4. 巻 2022(3)
2. 論文標題 日本マルクス主義研究の現状：マルクス経済学を中心として（中国語）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国社会科学評価	6. 最初と最後の頁 99-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ehara Kei	4. 巻 -
2. 論文標題 Reconstructing Marxian Theory of Ground Rent: Based on Japanese Development of Marxian Political Economy	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Capitalism Nature Socialism	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/10455752.2023.2168285	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江原慶	4. 巻 41
2. 論文標題 脱成長論のマルクス経済学的検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊経済研究	6. 最初と最後の頁 3-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20230225-002	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki Shinya, Ehara Kei	4. 巻 -
2. 論文標題 What is commercial capital? Japanese contributions to Marxian market theory	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Capital and Class	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/03098168211029005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江原慶	4. 巻 58(3)
2. 論文標題 資本による貨幣の変容：現代資本主義像の再構築のために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊経済理論	6. 最初と最後の頁 6-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 貨幣の変容論と現代貨幣理論
3. 学会等名 信用理論研究学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ehara Kei
2. 発表標題 Japanese Discourses on the Marxian Theory of Finance
3. 学会等名 経済学史学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 貨幣の変容論と現代貨幣理論
3. 学会等名 経済理論学会問題別分科会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 脱成長論のマルクス経済学的検討
3. 学会等名 経済理論学会問題別分科会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 脱成長論のマルクス経済学的検討の再検討
3. 学会等名 経済理論学会問題別分科会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 多様化する現代の労働とその行方 趣旨説明
3. 学会等名 政治経済学・経済史学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ehara Kei, Imai Akihito
2. 発表標題 The Japanese History of Marxian Value-form Analysis: focusing on Unoist approach
3. 学会等名 Historical Materialism Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kei Ehara
2. 発表標題 Reconstructing Marxian Theory of Ground Rent: Based on Japanese Development of Marxian Political Economy
3. 学会等名 SSK Invited Talk for Postcapitalism and the Innovation of Marxism (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 地主論の展開によるマルクス地代論の拡充
3. 学会等名 『季刊経済理論』特集論文研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 宮澤和敏著『資本主義動態の理論: 景気循環と構造変化』をめぐって
3. 学会等名 経済理論学会西南部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kei Ehara
2. 発表標題 Discussing R. Sasaki 's A New Introduction to Karl Marx
3. 学会等名 CSE/Capital & Class Seminar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 商品の同種性と商品債務
3. 学会等名 経済理論学会第 69 回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 土井日出夫報告「個人的所有の再建と社会的分業：マルクスとエンゲルスの異同を中心に」コメント
3. 学会等名 政治経済学・経済史学会秋季学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 「政治経済学」のアクチュアリティ：経済学と政治学の対話：マルクス経済学の立場から
3. 学会等名 政治経済学・経済史学会秋季学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 流通過程の不確実性とマルクス市場理論
3. 学会等名 金沢大学政治経済学セミナー
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Kei Ehara	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Palgrave/Macmillan	5. 総ページ数 208
3. 書名 Japanese Discourses on the Marxian Theory of Finance	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------